



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1981 精道教育促進協会(音園)三・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

マリリアの心 信仰と謙遜の心

「あなたは女の中で祝福された方で、あなたの御子も祝福された方です。(ルカ1・42) これは、聖母のご訪問のときに、エリザベツトが送ったあいさつのことばです。信仰と愛の一致のうちにキリストの祭壇に集うと、このあいさつが自然と口に浮かんできます。今の世の「霊的十字路」とも呼べるルルドの街で、聖母がなされたこと、今もなされていることを考え、天の御母への感謝の意を表すのです。(…)

病をせおうみなさん。みなさんは、この祈りの集いにとって、特別なおお客様です。病に苦しむ人々を助けるために、よるこんで寛大に奉仕してくださいるみなさん、よく来てくださいました。今、ご聖体に与るすべての方々も、ほんとうによく来てくださいました。みなさんは、ご聖体の秘跡に与り、聖母への信心を表わし、また、苦しんでいる兄弟や姉妹に一致していることを示しておられます。

聖母のあいさつは喜びのもと

聖母マリリアは、わたしたちの中に、霊的に現存されています。福音書をひもとくと、聖母のお声が聞えます。マリリア様は急いでお着きになり、エリザベツトのあいさつをお聞きになりました。「あなたのあいさつのお声がわたしの耳にはいると、わたしの子は胎内で喜びおどりました。(ルカ1・44) エリザベツトはその聖母の様子を見ましたが、私たちも同じように、マリリア様を見つめます。この大切な呼びかけを聞いて応えないわけにはゆきません。エリザベツトの喜びようは、神で一杯になった心から出るあいさつであらば、簡単なあいさつであっても、すばらしい賜物を内に秘めていることをはつきり教えてくれます。孤独の暗闇につつまれた重い心も、一条の光にもたとえられるほほえみや親切なことばのお蔭で、すぐに晴れ晴れとします。親切なことばは簡単に口にはできるはずなのですが、ときとして、なかなか口には出ないことがあります。疲れに負けてしまったり、心配事に気を取られたり、冷たい感情や、利己

的な無関心のために、そのひとことが口になせなくなるのです。人々のそばを通り過ぎてしまうことになるのです。無視された時感じるあの心中の悲しみを人々が耐え苦しんでいることにも気づかず、知っているのに顔を合わせずに。親切なことば、愛のこもった仕草、それだけで、すぐに、何かが人々の心のなかで目覚めるのです。心づかいや優しい態度は、むっとするほど風通しの悪い部屋の中にサツと入ってくる新鮮な空気のように、淋しさとみじめさに圧倒された心をうるおすのです。マリリア様のあいさつは、年老いたエリザベツトの心を喜びで満たしました。

信仰の徳

「あはしあわせなことを、主からいわれたことの実現を信じた方は。(ルカ1・45) 聖母のあいさつに答えて、エリザベツトの言ったことばです。エリザベツトが聖霊に充たされて言ったことばで、(ルカ1・41参照) マリア様の徳のなかでも主なる徳である信仰をきわだたせてくれます。教会の教父たちはマリリアの霊的生活におけるこの徳の意味について、よくよく考え、わたしたちが驚くほど大きな評価を与えています。教父たちの代表として、聖アウグスティヌスのことばだけを引用しましょう。「キリストを自分の体内より、もっと豊かに心の中でお生みになったのでなければ、母性はマリリアの益にならなかつたであろう。」信仰のおかげでマリリアは、恐れることなく、神の救いの計画の知られざる深淵に近づくことができました。神が「肉体となつて」、「わたしたちのうちに住む」ために来られることを信じよと言つても、簡単ではありませんでした。(ヨハネ1・14参照) というのも、主は、わたしたちの日常生活の取るに足らないことの中に、隠れることを望まれ、人間の弱さをまとい、多くの、ほんとうに屈辱的な条件に従われたからです。マリリアは、この「不可

能」な計画をあえて信じました。全能の御者を信じ、すばらしい神のご計画の、主な協力者となられたのです。これより、わたしたちの歴史に今一度、希望への道が開かれました。キリスト信者はみな、このような信仰を求められています。ただ人間の事柄にとどまらず、勇敢に、人間としての可能性や、限界を越えたところを見る信仰が要求されているのです。信者は神様を信頼しなければなりません。神は、人間の上に有しておられるご自分の主としての自由を示すために、しばしば、この世において、弱く、さげすまれていたり者を選ばれます。知恵のある者や、強い者たちを辱しめるために、「神のみ前で、だれにも誇らせないため」(コリント前1・29)に、そうなるのです。

教会の歴史二千年の間には、神の驚くべき御働きを確認する耳目をそばだてるようなできごとがたくさんありました。神のみ摂理にただ人間の説明のみを求め人々は、ただただ困惑してしまうのです。聖ベルナデッタの名を出せば、もう充分わかつていただけでしょう。しかし、現在、社会的にどれほど大切であるかが隠れたままになっている非常に数多くのできごとがあります。たとえば、誰にも知られないまま、あるいは家庭で、あるいは工場で、またあるいは事務所や働き続けて、一生を過ごした人々がいいます。孤独な隠遁生活をつづけ、祈りの一生を過ごした人々もいれば、毎日を病の殉教のうちに生活を送った人々もいるのです。やがて主の再臨のとき、すべてが明らかにされ、これらの人々が世界史の発展のなかで、みかけに反して、どれほど決定的な役割を果たしたかがわかることでしょう。そして、この事実はまだ、天国にいる聖人たちの喜びのもととなり、至聖なる神を永遠に賛美するのです。

小さき人々に…

「小さき人々」は、このよろこびをこの世においてすでに味わうことができます。神が、ご自分の計画をお示しになるのです。(マテオ11・25参照) マリア様は、心に神の知恵を受け入れた大勢の「小さき人々」の先頭に立つ御方です。それゆえ、聖母はエリザベットに「マニフィカット」を歌いました。時の流れをこえて、この讃歌は信仰深い心からほとぼり出る喜びの、最も純粋な表現と言えます。神の全能の力に対する驚きからくるはじけるような喜びです。人間という不完全な道具を使うにもかかわらず、神おん自ら、「偉大なこと」をしてくださいましたからなのです。(ルカ1・47-49参照) これはまた、神の正義つまり、「権力者をその座からおろし、低い人々を高め」(ルカ1・52) た神をみるよるこびであります。この歌は、最後に、神のご慈悲に対する喜びをあらわしています。

「約束に忠実な神は、ご自分の愛のつばきのもとにアブラハムの子供たちを集め、代々に、いつまでも、あらゆる必要事において、助けてくださるのです」。(ルカ1・50、54-55参照) これが、聖母の歌です。わたしたちの日常の歌とならなければなりません。実際、人間の生活のあらゆる面には必ずこの讃歌をあてはめることができます。乙女マリアは、この歌をうたうとき、まだ神の介入について何も

神の国とその正義

共にお告げの祈り(アンジェルス)を唱えるためにみなさんと集う今、教会は今日、ナザレトのマリアのご両親、聖ヨアキムと聖アンナを記念する日であることを忘れるわけにはゆきません。ですから、まず最初にわたしたちの心に浮かぶのは、神の御母に生命を与え

知らない婚約者ヨゼフの反応を考え、また、それ以上に御子の将来についての気がかりな預言について思いを巡らせていたのです。(イザヤ53参照)

マリアの心、つまりその信仰と謙遜、純潔を、わたしたち自身が努めてもつようにする

エリザベットの喜びよは、神で一杯になった心から出るあいさつであれば、簡単なあいさつであっても、すばらしい賜物を内に秘めていることをはっきり教えてくれます。孤独の暗闇につつまれた重い心も、一条の光にもたとえられるほえみや親切なことばのお陰で、すぐに晴れ晴れとするのです。

なら、精神の高まりをおぼえつつ、マニフィカットをうたうことができるでしょう。ミラノの司教、聖アンブロジウスは美しいことばで勧めています。

「マリアの靈魂の働きによって、一人ひとりのうちに、主がもっと大きくなりますように。マリアの精神によって各々の中にまします神がもっと讃えられますように。肉体とい

う面からみれば、キリストの御母はただお一人、しかし信仰によれば、だれもがキリストを『生む』ことができるのです。だれもが神のみことばを自分のうちに受けることができます。だからなのです。ただし、自分を掃きよめるからなのです。罪から解放されたおり、汚れのない慎しきをもって、貞潔を守らなければなりません」(聖ルカ福音書註解II、26)

みなさん、これこそ今日、聖母が伝えようとしておられることなのです。聖母の声をもし聞くことができるなら、御子の祭壇のまわりに集まったわたしたちにもう一度こう言うてくださるでしょう。「母が、子をなぐさめるように、私は、あなたたちを、なぐさめる。あなたたちは、イエルサレムにおいて、なぐさめられる」。(イザヤ66・13)

どのイエルサレムのことを話しているのかご存知でしょう。「上にあるイエルサレム」(ガラツィア4・26)のことです。ヨハネは、この町が、「花むこのために装った花よめのように、天から、神のみもとからくだるのを見た」と記しています。(黙示録21・2) わたしたちは、このイエルサレムを見上げ、そこに希望の思いをはせるのです。このイエルサレムにおいてこそ、わたしたちがすでに耳にしたあの預言の約束が実現するのです。「あなたたちの心は、これを見て、よろこび、あなたたちの骨は、草のように、いきおいづく。主のみ手はしもべの上にあられ、(敵には、怒りがくだる)。(イザヤ66・14)

「主のみ手」の至高なる現われを待つあいだ、神の開いてくださる道を毎日毎日歩み続けましょう。「巡礼者の糧」であるキリストの御体と御血の秘跡をわたしたちは手にしています。これは涸れることのない泉であり、私たちが生きていく間いつでも力と落ちつきと自信を引き出すことができます。すべてを知り、すべてをはかりたもう御方、わたしたち死すべき者の必要をみたしたもう御方、かの地においてわたしたちをあなたのものにしてください。聖なる民々と同じもの、共同のあと継ぎ、聖なる民の仲間としてくださいますように。アーメン。

方々への感謝の気持です。聖アンナはバチカン市国において特別に尊敬されていることもつけ加えましょう。というのも、この壁の内側の教区は聖アンナに奉獻されているからです。

「天の国は、畑にかくされている宝のようである。宝を見出す人は、それをかくして大喜びで去り、もっているものを全部売って、その畑を買う」。

「また、天の国は、美しい真珠を求める商人のようである。価の高い真珠一個を見つけると、もちものを全部売りに行き、それを買ってしまおう……」。(マテオ13・44-45)

このように、宝ものか、価の高い真珠のように、神の国、天の国は、あのナザレトの家に隠されていたのです。そこでは、ヨアキムとアンナの娘マリアが、お告げのその瞬間のために準備を整えていたのです。そして、「アンジェルス」の祈りのお告げの瞬間を黙想するときには、神の国、天の国が、

わたしたちの心の中、家庭の中、生活のすべての場に隠されているよう祈りましょう。兄弟姉妹のためにも祈りましょう。彼らがこの宝もの、この価の高い真珠をむだにしませんように。たとえどんな理由があっても、決してなくしてしまうことありませんように。「よし、全世界をもうけても、自分の命を失ったら、それが何の役にたつだろう」。(マテオ16・26)

キリストにおける愛するみなさん、「まず、神の国……を求めなさい」。(マテオ6・33)

説教・講話・書簡等の抄記

さらにきょうのこの機会に、主なるキリストに感謝を捧げたいと思います。先週の木曜日に閉会したルルドでのご聖体の大会は、多くの人々のうちの神の国を強めることができただけです。(…)

国際情勢を思えば、いたるところで、人々の平和な社会生活が、破壊や悲しみ、苦しみにより、おびやかされていることを思い出し、そのために祈らずにはおられません。とくに、ほんとうにひどく苦しめられている愛するレバノンのために心から祈ります。

終わりにあたって、キリストのことばをふたたびみなさんに贈りたいと思います。今は、このことばから、遠くかけ離れ、自分と異質のように感じられる人々にも、やはり、お聞きがたいと思います。

神の国を求めなさい。

神の国を求めなさい。そして、その正義も「まず、(神の)国とその正義とを求めよ。そうすれば、それらのものも加えて、みな、お与えくださる。」(マテオ6・33)

(一九八一・七・二十六 ローマ)

神のみが心を満たし得る

聖霊降臨の日になると、エルサレムのあの最後の晩さんの高間が心に浮んできます。あの高間で教会は生まれ、あの高間に教会は今も留まっています。教会はあの高間から、神の民の生ける共同体として、人類の歴史のなかで果すべき使命を自覚する共同体として、生まれたのです。

「聖霊よ、来てください。信じる人の心を満たし、あなたの愛の炎を燃してください。」(聖霊降臨の主日)と教会は祈ります。何度も繰り返されてきた祈りではありませんが、聖霊降臨の日には特に強く響きわたるのです。若人の諸君、「心を満たし、…」のところをよく考えてください。人の心がいかに大きくとも、神さまのみが聖霊を介して、それを満たすことがおできになります。

大学での勉強は、人文科学の多岐にわたって、諸君の眼前に素晴らしい世界を開いてくれます。

この外界についての知識と歩みをひとつに

して、諸君の自己認識も深まってゆきます。「自分は一体なものか」という疑問を以前から何度も繰り返してきたことでしょう。大変に興味のある問いかけであり、根本的な質問であると思います。何を基準にして人間を評価すればよいのか。肉体的な力を評価するのか、外部と接触する感覚によって評価するのか。それとも、テストや試験で確かめられる頭の良さを評価するのでしょうか。聖霊降臨の祈りは二つの評価基準を教えてください。人は心の大きさによって評価されるべきなのです。心とは聖書のことばで人間の内なる精神、とくに良心を意味します。つまり、心の大きさ、神さまに向かって開くことのできる精神の大きさを基準にして、人間を評価しなければなりません。聖霊のみが、愛と知恵のたまものを受けて自己完成を促すという方法で、心を満たすことがおできになるのです。

聖霊のたまもの

諸君と共に教会と国家の歴史である最後の晩さんの高間を前にして、本日は聖霊のたまものを祈り求めたく思います。ある日、父は私に一冊の本を手渡し、「聖霊のたまものを受け取るための祈り」を教えてくださいました。諸君から「父」と呼ばれる私は諸君と一緒に、知恵と聡明、忠告、剛毅、知識、孝愛のたまもの、つまり生命の神的な意味、人間の尊さ、心と体の聖性、そしておしまいに、詩篇作者が知恵の始まりであると言っている聖なる恐れのたまものを乞いねがうことにならなと思っています。

父に教わったこの祈りを諸君にも受けて欲しいと思います。忠実に祈りつづけてください。教会の「高間」に留まり、歴史の底流とも言わなければならない一致していることができるでしょう。

自分の人生、人間性をはかる基準に何を認むかによって、諸君の生き方は大きく左右されます。数多くの基準があります。勉強にそしむ期間、ついて職業に従事するとき、個人的な人間関係その他で人を評価する基準はたくさんありますが、それらを見極めなくてはなりません。

恐れずに生きる

聖霊の降臨された高間、人間の歴史の高間


でキリストがお与えになった評価の基準を勇気をだして受け取ってください。自分の生き方を近くからも遠くからも見つめ、聖パウロがローマ人に書き送ったことばを勇敢に受け取って欲しいのです。「全被造物が今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っていることを私たちは知っています。」(ローマ8・22) 私たちはここで言う苦しみの証人ではないのでしょうか。実際、全被造物は切なる憧れをもって神の子のあらわれを待って、「ローマ8・9」にいるのです。

造られた世界全体は、単に大学その他の高等教育の機関が技師や医師、法律家や歴史家、哲学者や文学者、数学者などを育てることを望んでいるだけでなく、神の子のあらわれを待ち望んでいるのです。将来、医師や技師、法律家、教授になるだろう諸君から、「この」あらわれを期待しているのです。

神の似姿を与えられた人間は、キリストにおいて、自分のもつ神的なところをあらわすよう、また、いくぶんなりとも自分の生き方のうちに神ご自身をあらわすよう、キリストに召されていることを、自覚しなければなりません。(…)

最後に、聖霊が私たちの弱さを助けにきてくださるよう私のお祈りください。

(一九七九・六 ワルシャワ)



最近では、日本国内でも色々なメディアを通してヨハネ・パウロ二世教皇様のニュースが、報道されるようになって参りました。しかし、教皇様ご自身によって発せられたお言葉を伝えるものは、なかなか見当たらないのが実情です。

この「教皇様の声」は、是非とも教皇様ご自身の御言葉に接したいという多くの方々の御要望にお応えして、世界各地でヨハネ・パウロ二世教皇様がなさった説教・講話、また教皇様の書かれた書簡などを、解説を加えずにそのまま日本語に訳して収録し、毎月皆様に届けるものです。

年間購読申込方法

- ◎毎月配布されている教会等では教会へお申込みください。(年間購読料720円)
- ◎個人でお申込の方は1,440円(年間購読料720円+送料270円)を郵便振込にてお送りください。2部以上ご希望の場合は、下記の送料が別途です。

年間送料	2~4部	840円	5~8部	2,040円
	9~19部	2,880円	20部以上無料	

(郵便振込 神戸072393 福音教育促進協会)
◎第1号からの在庫があります。同時にお申込みください。

不変の教え

使徒職の大切さ

教会が、そして教皇自らがどの程度あなた方信徒の使徒職を頼りにしているか繰り返す必要があるでしょうか。教会においてまさしくあなた方がすべき仕事は根本的に重要です。だれもかわりをするとはできません。司祭や修道者によってもかわってもらえない仕事なのです。司祭や修道者に私は、かれらに固有な聖務に精をだしてくるようつねに激励しております。

私はかれらに司祭は司祭として、修道者は修道者としてふるまうよう願っています。あなた方には、家庭や社会や職場で一日中責任ある真の信徒として振舞ってほしいのです。そして、この世界とその機構を神の子供の尊厳に満ちた世界にするよう努めながら、キリストの証人となり、その現存を人々に示さなければなりません。このようにして、男性諸君は人間の能力を進展させるのです。女性も同じことです。みなさん方は今日、使徒職を実践するにあたり女性らしい資質の全てをあげてすばらしい働きをする場をもっておられます。世界の中でみなさんがみずからにふさわしい場や責任をとるべきことが次第に増えています。

一言で言うなら、キリストの預言的、司祭的、王的使命、つまり教会の使命に、みなさん方は例外なく、洗礼と堅信によって参与するのです。

道徳律の大切さ

さて、あなた方は「今日の世界で幸福であり得るか」という問題を提起しています。(…) 実にあなた方は、あの若者と同じ質問を発したのです。キリストは答えになります。

(一九八〇・五・三〇 フランス)

彼に、そしてあなた方に、「そう、できます」と。主が実際に口にされたのは次のことばです。「主の答えの内容は、「そう、できます」だったのです。「命を受けたいのなら、錠を守れ。(マテオ19・17) もう少しあとになつてから次のようにお答えにもなりました。「もし完全になりたいなら、持ち物を売りに行き、貧しい人々に施しをせよ。(マテオ19・21) これらのみことばの意味は次のようであると思われまふ。つまり、人間は、人間性自身と人間のもつ尊厳とが「要求するものを受け入れる」度合に応じて、幸福になれる。それらは神が要求なさることがらなのです。

このようにキリストは、単に幸福になれるかという間に答えられたばかりでなく、さらに「どのようにすれば」幸福になれるか、「幸福になる条件はなにか」をも教えてくださいました。主の答えは全くもってオリジナルであつて、それにまさる答えもなければ、意味がなくなることもありません。みなさんは主の答えについてよく考え、自分の生活に適要しなければなりません。キリストのお答えには二つの面があります。まず第一に、錠をよく守るように努めよ、ということ。ここで話は少しそれるのですが、みなさんの第十七番目の質問、性道徳についての教会の教えに言及したいと思ひます。みなさんは、錠を守るに難しく、それゆえに若者たちが教会から遠ざかってしまふという心配を表明されているのですが、私はこのように答えます。もしあなた方がこの問題をまじめに考え、問題の核心に触れるなら、きつと一つの事に気づくはずで、この分野で教会は真の夫婦愛、つまり責任ある愛に関係のあることから要求している、ということ。これは、人格の尊厳と社会秩序のためにぜひ必要なことなら

愛するみなさん

です。人はそれらの要請を自分自身で担つて始めて自己を完成できるのです。逆の場合、(福音書の若者のように)「悲しうに」立ち去ることになります。倫理道徳をゆるめたところで人間を幸福にすることなどできません。消費社会になつても人々は幸福になりません。そんなことはかつてあつたためしがないのです。(フランスで若者たちに答えて)

祈りごじ聖体

祈りの人であるようお願いいたします。あなた方の使徒職に実りを与え、あなた方の考えや望み、行動を浸して浄化し高めるのは神の霊であるからです。信徒は司祭や修道者と同じく聖性に召されています。祈りこそ聖性に到達するための道なのです。さらにあなた方には、感謝し、まわりの人々のために執りなす無数の機会が与えられています。

あなた方はまた祈りについても尋ねました。祈りの定義は数多くありますが、最もよくいわれるのは神との楽しい対話であるということとです。私たちは誰かと語り合うとき話すだけでなく、聞くこともします。従つて、祈りとは、聞くことでもあるのです。それは恩恵の内的な声に耳を傾けることを意味し、呼びかけに傾聴することです。

それではあなた方のパパ様はどのように祈るのかという質問に答えることにしましょう。すべてのキリスト信者のように話し、そして聞きいます。時々ことばなしに祈りますが、そのときは聞くことを中心にしているときです。最も大切なものはまさにその聞こえてくる事柄です。さらに、祈りを数多くの業務や活動、仕事に一致させ、またその仕事を祈りに一致させるよう努めています。このように

して来る日も来る日も神への奉仕や職務を遂行するように努めています。それらはキリストのみ旨と教会の守るべき伝統からくるものだからです。

今もキリストは私たちが愛し、私たちの救霊の源泉としての聖心を示しておられます。「神に近づく者のために取り次ごうとして常に生き」(ヘブライ7・25)ておられるのです。この聖心の愛はいつでも私たちが全世界を暖かく包み込んでくださいます。人間を非常に愛して下さつておられる聖心に答える人はなんと少ないことでしょうか。

聖パウロは言っています。「私を愛し、私のためにご自身をわたされた神の御子への信仰の中に生きる」(ガラツィア2・20) 主の愛について考えれば、自然に主のご受難の黙想へと発展します。主は私のためにご自分を引きたたされました。これは世の罪一般だけではなく、主に御苦しみを与える私たち一人ひとりの罪を自覚しなければならぬことを意味しているのです。

このように私たちは主の愛に完璧に応えるため、また私たちの活動つまり使徒職と全生活とを奉獻するために召されているのです。

ミサ聖祭において十字架の上のつねに新たな唯一の犠牲を再現します。十字架の上では、主のとりなしとは切り離しえない救いのみわがが永遠に現存するものとされるのです。

ミサ聖祭においてキリストご自身を拝領します。全ての恩恵の源である唯一の司祭、唯一のいけにえであらせられるキリストは、ご自分の奉獻と礼拝のなかに私たちが引き込んでくださいます。

ご聖体の秘跡において、私たちは使徒職の効果と内的生活の進歩のもととなる愛の活動に参加するのです。「私は地上から上げられて、すべての人を私のもとに引き寄せる」(ヨハネ12・32)

(一九八〇・六・一 モンマルトル、聖心大聖堂)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十四送料六十円
 一年予約七百二十円送料七百二十円 二十部以上一括購入送料不要

郵便振替 神戸 072393